

# ZOCALO 2012 2 ▶ 3



## それぞれの50年 企画展「清水晃・吉野辰海 漆黒の彼方／犬の行方」 会期:2012年 2/11(土・祝)～3/25(日)

若手美術家の登場に目を向けがちなのが近年の傾向ですが、ベテランの美術家の奥深い世界をじっくりと味わいたい方にとっては、「清水晃・吉野辰海 漆黒の彼方／犬の行方」はまさに打ってつけの展覧会です。清水晃さん(1936年生まれ。埼玉県杉戸町在住)と吉野辰海さん(1940年生まれ。埼玉県秩父市在住)はともに1960年代初めにデビューして以来、半世紀以上にわたり制作を続け、70歳を過ぎた今も精力的に新たな試みに挑戦しています。ふたりは1960年代からの顔見知りで、しばしば同じ展覧会にも出品してきた間柄ですが、その作風は全く異なります。それぞれの50年間の歩みを振り返ると、清水さんと吉野さんの制作の独自性が鮮明に浮かび上がると同時に、戦後の美術がいかに多面的であったかということも思い知らされます。

では、ふたりの制作活動について紹介しましょう。富山市で生まれ育った清水さんは、金沢美術工芸大学卒業後に上京し、川崎の町工場働きながら制作を始めます。都内の画廊をめぐる前衛的な美術に触れるようになると、廃品を組み合わせたオブジェ、地図やノード写真によるコラージュなど実験的な作品を次々と発表していきます。1963年の色盲検査表をもとにした作品では、新人美術家の登竜門であったシェル美術賞の一作を受賞するなど、若くして注目を集めました。しかし、1970年代に入ると、最先端の動向を意識したそれまでの作風を一転させます。自らの記憶を遡っていくような内向



清水 晃《漆黒から》1990年/作家蔵 撮影:大谷一郎

的な表現が目立つようになり、コラージュによる作品集『目沼』などが制作されます。これらの作品では、生まれ育った富山の風土や幼少期の体験が重要なインスピレーションとなっています。寒鰯漁の頃に富山でとどろく雷「鱒起こし」、冬の海岸線や雪景色、父親の営んでいた理髪店の鉄や回転灯など、いわば清水さんにとっての原風景がモチーフとなって登場するようになるのです。

1970年代末からは、記憶の遙か彼方にあるものを探し続けるかのように、素描とオブジェから成るシリーズ《漆黒から》を始めます。真黒のラッカーで着色されたオブジェは、木、竹ひごなどで骨格がつけられ、漁火の電球、釣針や錘、貝殻など、富山の海岸で拾った収集物がその骨格に組み込まれています。海の記憶をちりばめながら鋭い垂直性を軸に構成される漆黒のオブジェは、異様な姿をしており、見る者を闇から威嚇するかのようになっています。このシリーズは15年以上も続き、1000点を越える作品が生まれ、清水さんを語る上で最も重要なシリーズになりました。

一方、宮城県出身の吉野さんは、弱冠20歳で伝説的グループ「ネオ・ダダ」に加わります。ネオ・ダダは1年に満たない短命なグループでしたが、従来の美術表現から逸脱した過激な活動を展開し、美術の可能性を大きく切り開きました。吉野さんは最年少にも関わらず、このグループの催しに積極的に参加します。

ネオ・ダダから美術界に飛び込んだ吉野さんは、1960年代を通して精力的に作品を



吉野辰海《SCREW 唐辛子犬》2011年/作家蔵

発表しますが、1970年代になると、自らの表現の核をもう一度洗い直すようになります。そこで浮びあがってきたのが、幼い時に一緒に過ごし、終戦の頃に行方のわからなくなった犬のことでした。犬とともに蘇る戦後の風景を思い起こしながら、1970年代末に《投影装置の犬》が制作されます。この作品は犬の胴体の中に、吉野さんにとっての原風景をミニチュアにして納めたもので、それをファイバー・スコープで覗く仕組みになっています。つまり犬は、記憶が詰め込まれた器としてあらわれたのです。その後、犬は吉野さんにとって欠くことのできないモチーフになり、数多くの犬の立体作品が生まれます。人間のように立ち上がる犬、宙に人を吐き出す犬、頭部が双頭になった犬、水のようにたおやかな体をもつ犬、唐辛子を頭にのせた犬。さまざまな姿に変貌する犬はユーモアや悲哀を感じさせながら、作品の意味や解釈に広がりを与えてくれます。また、万物の運動を暗示する螺旋(SCREW)が造形の根底に据えられている点も、吉野さん流の独特の方法論といえます。

2009年に吉野さんは新たなシリーズ「象少女」を発表しています。このシリーズは、色白で華奢な少女の身体に、極彩色に彩られた象と犬の頭部がのった立体作品になっています。まさに異種混交の刺激的な作品であり、今後の展開が期待されます。

このようにふたりの作風は全く異なりますが、活動の軌跡にはある共通性が見られます。それは、キャリアの途中段階の1970年代に、自分が積み上げてきた世界を再構築するかのごとく、自分にとっての表現の原点を見極め、進むべき道を改めて見直したことです。そして、表現の原点を探る上で鍵となったのが、記憶に染みついて消し去ることのできない原風景であったといえるでしょう。この点が、ふたりに共通しているように思われます。

展覧会では、あまり知られていない作品や資料も含め、ふたりの制作活動を回顧していきます。ベテランの美術家が長年にわたり思考錯誤を重ねてきた、厚みのある表現世界を、是非、噛みしめていただきたいと思います。(I.H.)

### 記憶の地層を掘る

「大浦一志 一自然と人間—雲仙普賢岳との20年」に寄せて



旧大野木場小学校(右)と大野木場砂防監視所(左)

おおうら かずし 大浦一志さんから、半年間、普賢岳に滞在して被災地の発掘作業を行うと聞いたのは2010年秋のことでした。1991年の大火砕流被災の後、1992年に始まった大浦さんの現地でのフィールドワークが2011年で足かけ20年を迎えることから、この節目にMOMASコレクションで「アーティスト・プロジェクト」として紹介したいと持ち掛け、実現を図ることになりました。その後、3.11の東日本大震災や原発事故などが起こりましたが、大浦さんは4月中旬に島原に到着、発掘作業の準備に入りました。筆者もこの機会に長年の宿願であった被災地の作業現場訪問を果たそうと、5月下旬の週末に現地を訪れました。

5月21日朝。大浦さんの案内で、旧大野木場小学校を見学。同校は1991年9月15日に発生した火砕流の熱風により被災。現在は、隣地に大野木場砂防監視所(愛称:砂防みらい館)が建ち、被災した校舎がそのまま保存・展示されています。融けてひび割れたガラス、焼け落ちた窓、鉛のように曲がったアルミの窓枠、曲がり錆び朽ちかけた鋼管など、熱風の生々しい傷跡が今も伝わってきます。

ここからさらに数百メートル上ったところが、長崎県南高来郡深江町成1600番地、大浦さんが通い詰めた現場です。草をかき分けた先に



普賢岳を望む発掘作業現場

火山灰に覆われた区画が見えてきます。右手に眉山、左手には普賢岳を間近に望む場所です。所々に掘られた穴が見えます。1991年の被災時の地表は2メートルほど掘り進んだあたりだそう。当時の居住の痕跡と思われる焼けた木片や金属片などの「出土品」が穴の縁に並んでいます。仮設道路を挟んだ隣地では、縄文後期の「権現脇遺跡」の発掘が並行して進んでいるということです。

スコップを手に穴掘りを試みました。深く掘るにはらせん状に広げて階段状の足場を作りながら掘り進む必要があります。身の丈ほどの深さになると土をかき出すのも大仕事です。10分も続ければ息も上がる骨身にこたえる難事業です。真っ黒に日焼けした大浦さんは、ウンボや他人の手に頼るのでなく、自ら体をはって進めています。何日もかけてせかく掘った穴も、強い雨が降ると灰や泥が流れ込んでひとたまりもありません。それを防ぐために石を積んで堤防代わりにし、流れの向きを変えるのだそうです。

発掘作業を続けていると「すいません」と突然の訪問者がやってきました。テレビ朝日の撮影クルーで、2日前に火砕流の映像を撮影した場所を探し、同じ場所からの現在の映像を撮りたいのだといいます。「大火砕流被災から20年」を「3.11からの復興のヒントに」というニュース特集の取材でした。大浦さんが現地の生き字引ともいべき本田雄峰さんを紹介、本田さんの助力で目的を叶えたようでした。

3.11から9か月余が経過し、新たな年を迎えました。悪夢のような大津波の映像や「3.11以後」という言葉に触れる機会も、次第に少なくなってきたようです。1991年6月3日の大火砕流被災を報道で知り、何かに駆られるように現地に入り、「自身の五体・五感を通して」20年にわたって定点観測とフィールドワークを続けたひとりの美術家の営みは、情報や記号だけが上滑りして実体が捉えにくくなった現在、記憶の地層のありかと、そこに至るひとつの道を示しています。(M.N.)



穴の縁に並べられた「出土品」



大浦一志さん

### 中銀カプセルがやってきた!

埼玉県立近代美術館が、黒川紀章設計の初めての美術館であることはご存じでしょうか。1982年に開館し、今年30周年を迎える当館に、すばらしいプレゼントが贈られました。

寄贈されたのは、黒川紀章の傑作であるばかりでなく、戦後の日本建築を代表する、中銀カプセルタワービルのモデルルームです。

1960年代、丹下健三の影響のもと、黒川紀章や菊竹清訓などの建築家たちは「メタポリズム」という建築運動を繰り広げました。「メタポリズム」というと、最近では良くないイメージですが、本来の意味は「新陳代謝」です。彼らは、生き物のように増殖していく建築や都市のイメージを夢見ました。

その構想の多くは実現することがありませんでした。この中銀カプセルタワービルは夢で終わることなく、1972年、東京銀座8丁目に建てられました。

その3年前の1969年、黒川紀章は「カプセルとは、ホモ・モーベンス一動民のための住まいである」と「カプセル宣言」に書いています。つまり、自由に移動する都市生活者である個人のための空間です。さらに宣言では、カプセルを「個人を中心とする新しい家族像の確立」や「組織に対する個人の挑戦」と意味づけています。

1970年、大阪万博でカプセルの実験を行った黒川紀章は、ここでビジネスマンのセカンドハウス、セカンドオフィスという具体的な機能を実現しています。外装がプレハブだけでなく、内装には家具やオーディオ、テレビ、電話まで、工場でセットされていました。

このカプセル・モデルは、長くカプセルタワービルの1階にひっそりと置かれていましたが、森美術館の「メタポリズムの未来都市展」への出品に際して、外装も内装も洗浄・塗装され、美しく生まれ変わりました。その際、天井と絨毯は、映像に映っていたオリジナルの色に戻してあります。

カプセルタワービル本体は、老朽化のために取り壊されることが決まっていますので、このモデルはとて貴重なものとなります。黒川紀章の夢が結晶化したこの遺産を、埼玉県の宝として大事にしたいと思います。(Y.M.)



搬入の様子



無事、設置されました